

澱川西岸一覽

下り船之部

上

淀川

兩岸

一覽

下町之町

二冊

曉晴夕相若  
東川半山島

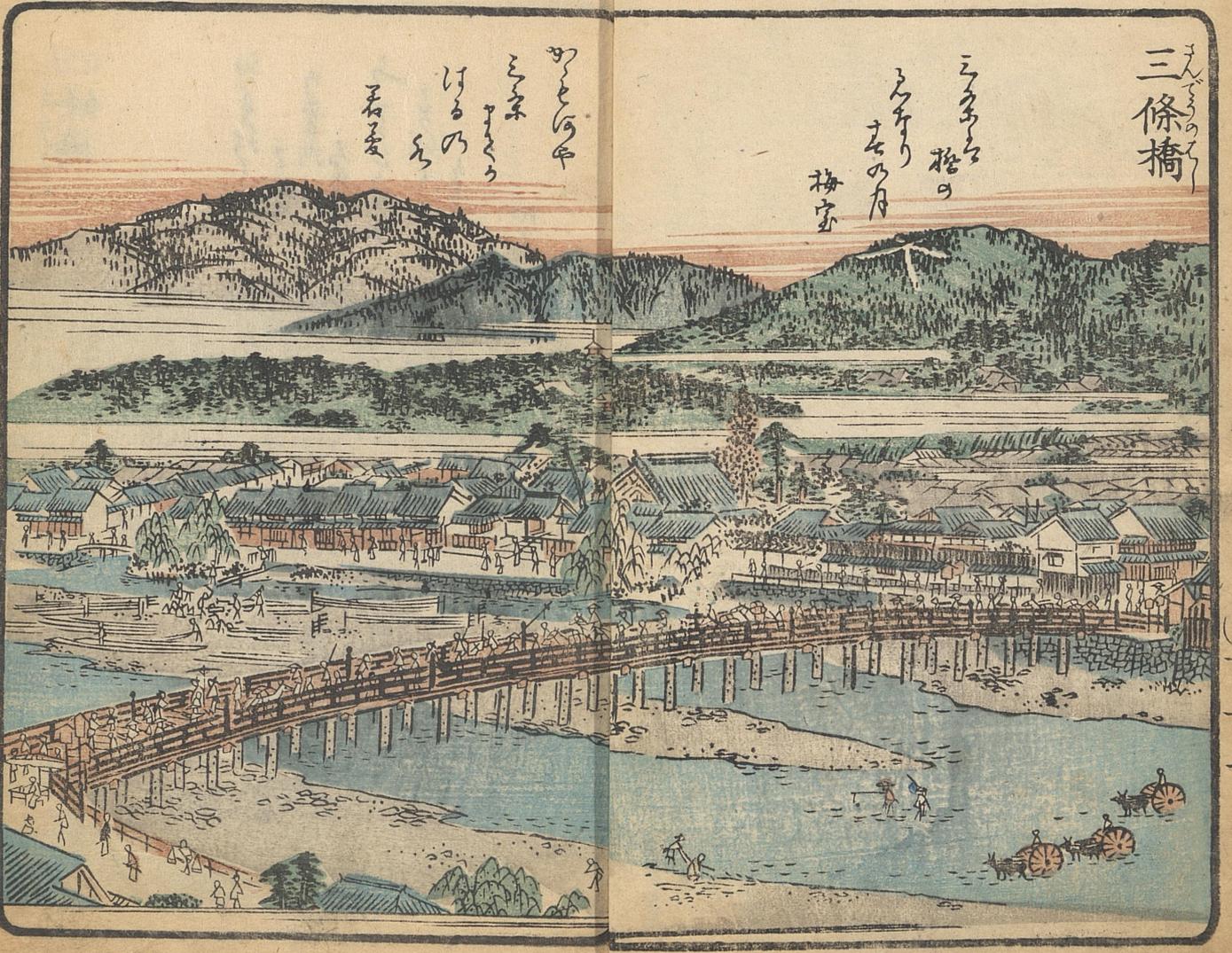
日上活地後塔紅登  
朝德澤仰年豊千門  
萬戶民相安禮樂長  
存三代風  
橋齋



三條橋

三條橋  
梅家

三條橋  
梅家



四條橋

舟を以て

舟を以て

舟を以て

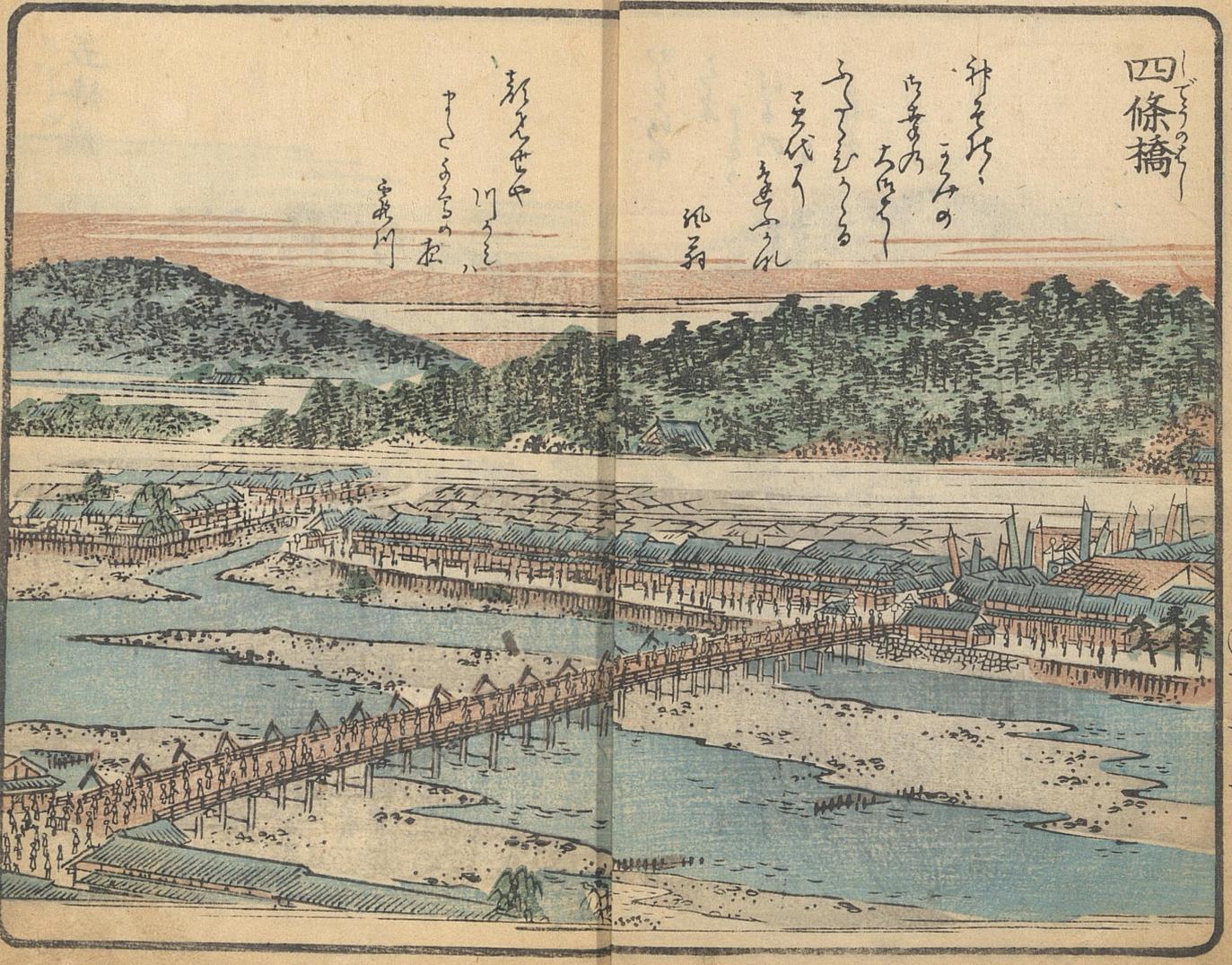
舟を以て

舟を以て

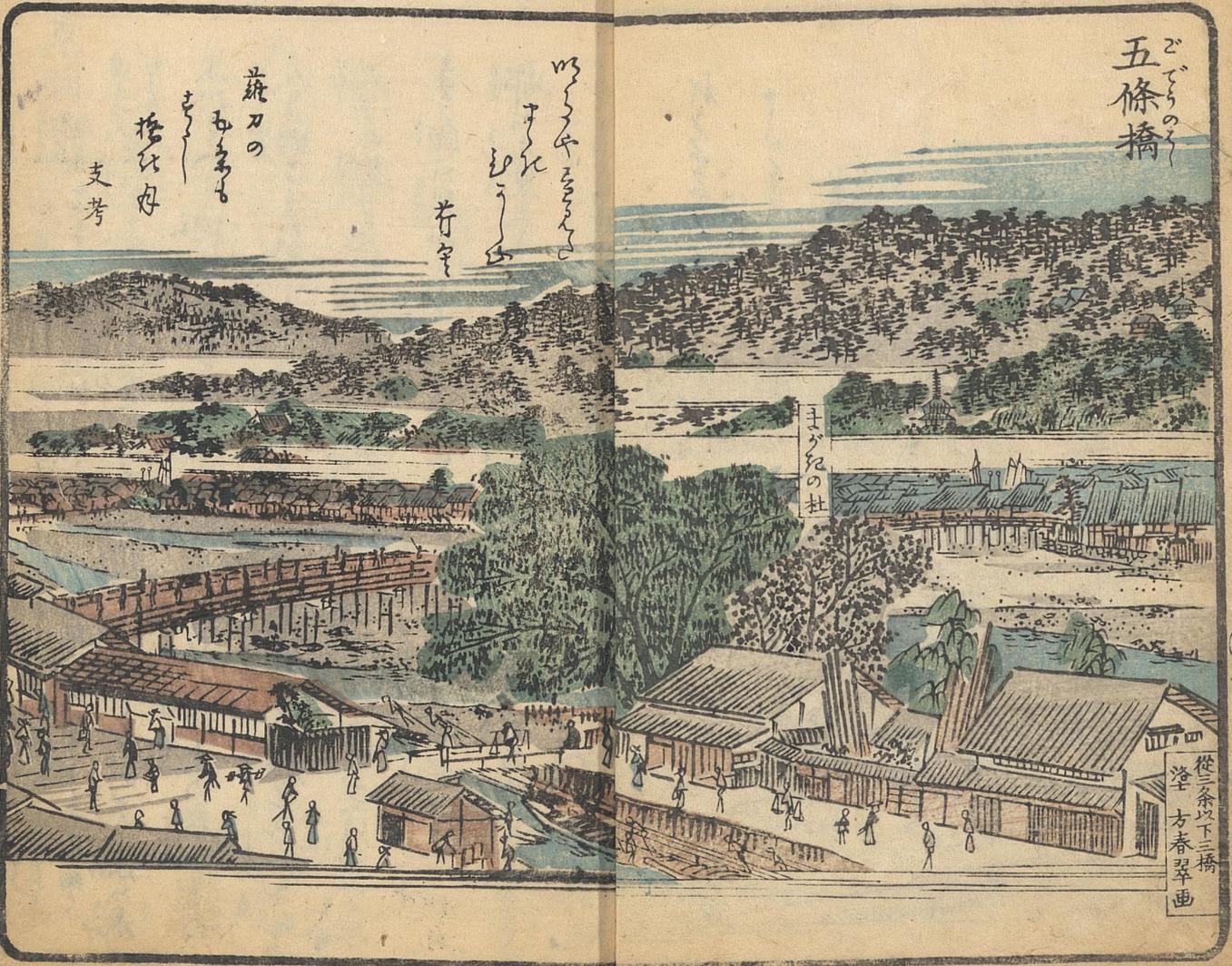
舟を以て

舟を以て

舟を以て



五條橋 ごじょうのりゅう



從三條以下三橋  
望方春翠画

三ヶ尻の社

明  
くさ  
くさ  
くさ  
くさ

す  
くさ  
くさ

芥子

菟刀の

むさし

くさ

松林舟

支考

京師

詩經云劉篇陔南岡乃觀于京京師之野云是也前漢書曰京邑之野

茶筵獨斷云天子都之於河與京師之於河也

地下之水過之於河也地上之衆きりの

人過之於河也京の大なり師の衆きり大衆の居る所を以て

天子の都より河に爾雅云天子高き居て遠く以て視の意

なり師の衆きり人民衆くあふ衆の謂云抑平安城の

都の人皇五十代桓武天皇興基りより今の柳代に至る

一千有載遷都すは神代より其創り定は天津日嗣

の位もひてより御堂灌川の流きたるべは位の高砂の松の葉

の散るまびく億兆の歳と彌らんを知らるる又都と華

の訓も花洛とも稱せり

昔より都ありたるあゝの里はた吾國のち中なり

後京極

洛陽三條之橋至後代化度往還人磐石之礎入地五尋切石

柱六十二本蓋於日域石柱濫觴乎天正十八年庚寅

正月豊臣初之御代奉増田右衛門尉長盛造之

月清

三條橋

加茂川は架は東國より平安城に至る候より其橋の形人常の形を以て

洛陽三條之橋至後代化度往還人磐石之礎入地五尋切石

柱六十二本蓋於日域石柱濫觴乎天正十八年庚寅

正月豊臣初之御代奉増田右衛門尉長盛造之

いまりかぶら  
稻荷御旅所

御旅所

まのり

ちんちん

鍵のま

まのり

いまり

沖のま

千蔵

鶴成



更衣 三條の 只丸

五條橋 三條橋の下に有初の松原通に架せり則五條通に秀吉公の時此所に

羅目石の銘あり 維陽五條石橋 正保二年乙酉十一月吉日

奉行 小川藤左衛門尉正長

此橋上の半より東に向ふ洛東の勝地木の間に小頭れり  
平安の佳景あり止る

蒲團着て痛くうとてやびり山 嵐雪

是と本街道とを老人足弱の杖に高瀬川の下舟をせ伏見より

も有又西の辺より伏見より東洞院の車道九條より東竹田と經り  
伏見の黒門に至る或油小路より竹田と經り黒門に出る是と竹田

街道と号し 西竹田東竹田と西 又陸路に東寺より鳥羽街を經て

淀に至るも有或は伏見より淀に出るも有り又東寺の四塚より

桂川と越り山越に至り高槻より鳥飼江口柴嶋と長柄み出て大坂

小至り 俗に西街道或は山越越り此道傳は長岡の天神向の明神山崎の八幡

道祖神社 江口の若堂柴島のさし堤を有る其まがかりはよき往來あり  
油路通七条下る東洲にあり祭神 猿田彦命 世人首途神と稱は  
社内 天満宮あり碑と建鳥石首辰の銘篆字に岡白駒の筆あり



とほののりもち  
竹田分道  
あらくもあん  
安樂壽院

あらくも



箱荷御旅所 道祖神の南二丁より約一里の神樂五座毎年三月中の十日此より  
神幸のりて四月初の卯の日還幸まで以後所よりす

竹田 同南より伏見往來の順路なり此より過り真備すの地なり  
安樂壽院の良の井と龍若の池あり

安樂壽院 竹田村あり 北の方の本堂より約一里の處にあり 法皇御製  
本御塔 五重の塔に故の名あり 本尊 卍字阿弥

陀佛 下より法皇宸筆の法花經と收む 薬師堂 行基作 五輪塔 此より收む  
三昧土佛 本堂の東より釈迦彌陀 基盤梅 鳥羽上皇城南の宮中より收む  
薬師の手像は弘法大師の作 圓基と林より收む 基盤集め

冠石 本御塔新御塔の間より 冠の形より名あり 名は  
南の方の本堂より一里の處にあり 阿弥陀佛と安置し春日の作此塔は豊臣秀頼公の  
殿檀安置あり 二重塔 御建立あり鎮守祠塔の傍にあり

右の油小路より下る道條より則安樂壽院の東門前より東  
洞院の街道より出く伏見黒門に至る

柳茶店 東洞院通九条村より車道の傍にあり 藤茶店 東竹田村より茶店より  
柳の並木ありて美き茶店あり 友の柳ありて名あり

右の東洞院通の街道と伏見黒門口に至る道條より

高瀬川 加茂川の西より東竹田の北より加茂川へ合へ又分れて伏見に出る加茂  
川の竹田の鐵取りの橋下と流れて小枝の橋と經り深川へ入

高瀬の川條の中頃内裏御修理の材石と運がらん角倉  
了以の作より嵐山の碑より見へる高瀬船は毎朝伏見より荷物と

了以の作より嵐山の碑より見へる高瀬船は毎朝伏見より荷物と

了以の作より嵐山の碑より見へる高瀬船は毎朝伏見より荷物と

了以の作より嵐山の碑より見へる高瀬船は毎朝伏見より荷物と

了以の作より嵐山の碑より見へる高瀬船は毎朝伏見より荷物と

了以の作より嵐山の碑より見へる高瀬船は毎朝伏見より荷物と

柳茶屋  
車道

柳茶屋  
牛の草中の  
層雲外  
知行

水と流さ  
柳茶屋

沓作  
車の上ヤ  
風善

ねそろの  
九條  
柳茶屋  
柳只



ナ  
ナ  
ナ

高瀬川

休朝老蹇就平夷  
安坐不嫌篙子遲  
官關有便分水路  
糞船何必插官旗  
已過離島市聲遠  
漸及竹田林影垂  
蕭寺今宵欲投宿  
桃山恰是發花時

島標隱

一子や

河原より

若く水

あつちや

狗とつと

ふん

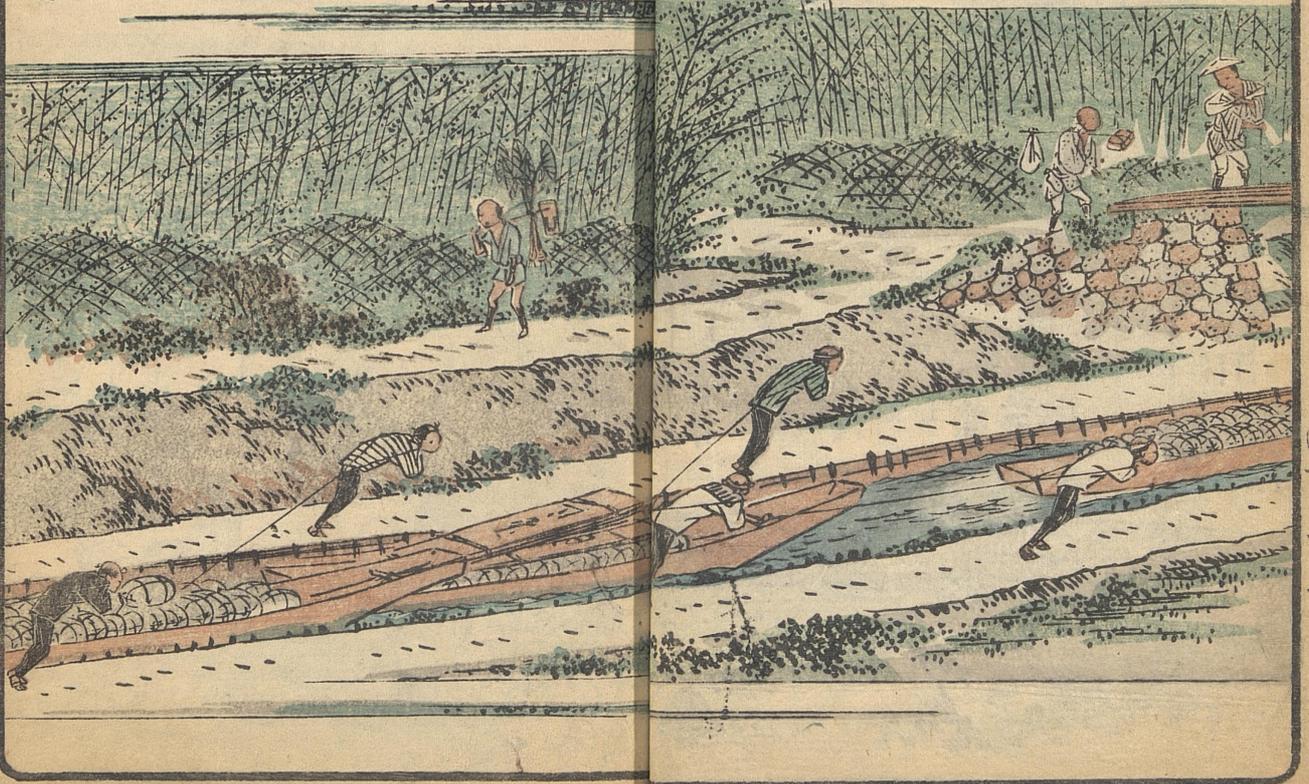
一刺

虫のま

中とちや

ふん

舎蕃



下りつ士

下りつ士

東竹田

藤茶屋

龍宮

まじらふ茶屋

なまこ餅

豆腐屋

茶屋の廊

力丸

そのまのれん

撒

ふの茶

半の園

夕吼

源

まろ

孫の冠

柳亭

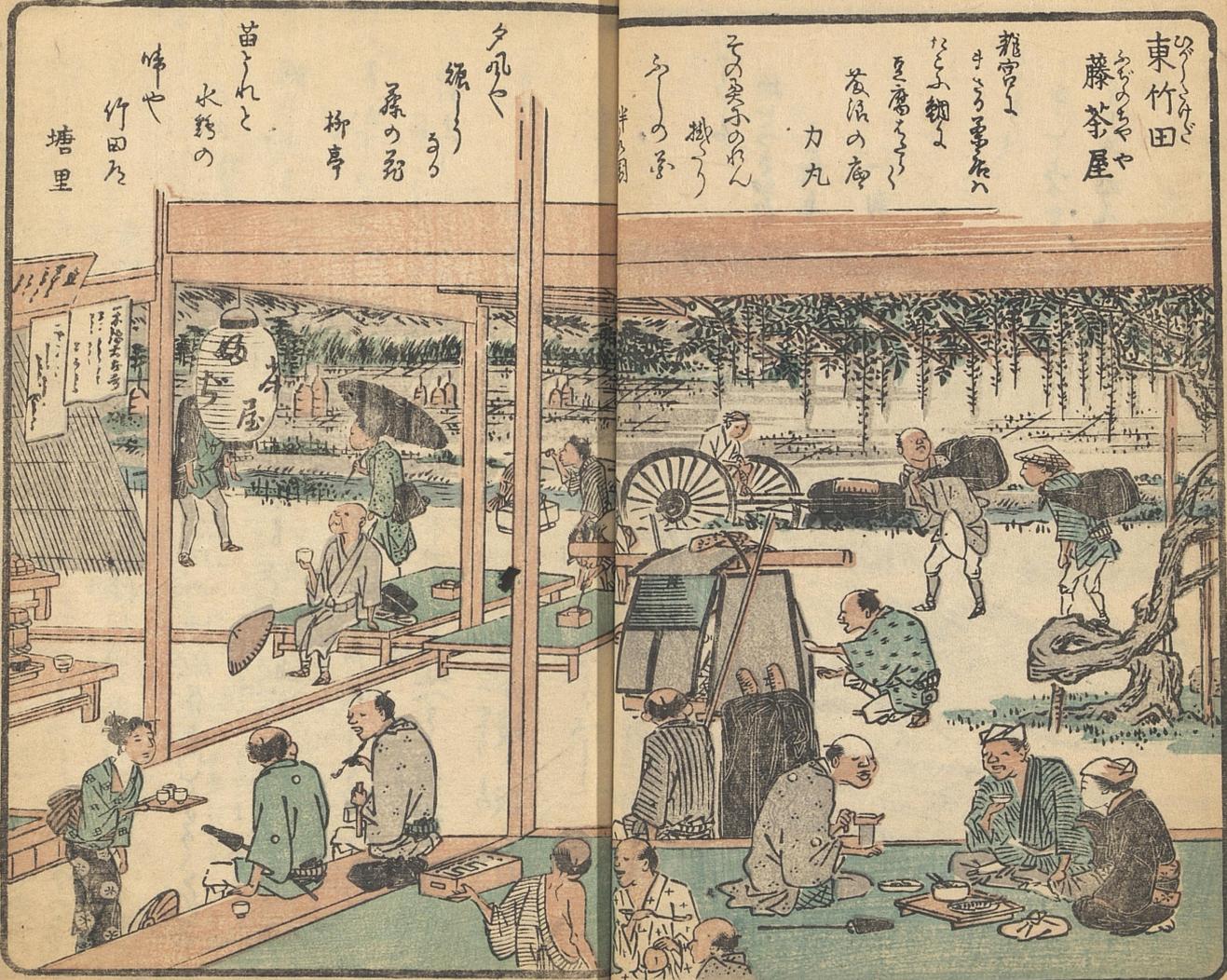
苗これと

水鏡の

情也

竹田乃

塘里



積つみて京きやう上かみアア夕ゆふ又また荷にと橋はして下くだふ加條下橋より毎夕伏見便舟のり

足あしと寄よるあひてのり東あづま竹たけ田の街まち道みちへこ此こ船ふね川がはへ添ひひ或あるいは離はなれは下くだるなり

伏見ふし見船場ふねばた 京橋きやうばし阿波橋あはばしより大坂おおさか着岸あきづきのと淀川よどがはの通船とほふね昼夜ひるよるとく着あり

りり出いるでああつつ其その軀みひひ言いべべくくももああららばば船宿ふねしゆくの男女おとこの軒のき出いる

くく下くだアアああれれババ今いま出い舟ふねががささりりままははとと声こゑ喧あやしくく客きやくとと招まねくく裏うら

たた上かみりり客きやく支度しどとと調しらふふ船頭ふねがしらへへ下くだアア客きやくとと迎むかへへ荷物にものとと運はりり上かみる

もも下くだるるもも御機嫌ごきげん克よくここ船頭ふねがしら衆しゆく仕切しきりとと随分ずいぶん緩ゆるとと取とりりとと付つ

三さん柵さく 伏見ふし見船場ふねばたの向むかひの口くち止とどめめ是こゝはは詞ことばの色いろなりなり

天武てんむ天皇てんかう社しゃ 禪刹ぜんせきあり行基ぎやうき菩薩ぼさつの関せき基もとにて本ほん尊そん佛ぶつ十二じふに神かみ將しやうともとも行基ぎやうきの作しやくとのみ

伏見ふし見口くち 下くだ三柵さんさくの下した三柵さんさくの渡わた所ところ石錢いしせん番所ばんじよ黒門くろもんより伏見ふし見

淀堤よどかみ 伏見ふし見口くちの下したより伏見ふし見口くちより淀領よどりやうの境さかいまま水上みづかみ凡およ九く十二じふに丁ちやう半はん余あ

千両松せんりやうまつ 堤かみの間の松まつといいふふ或ある云いふふ數かず株かぶの内うちにに其その形かたちよよくく名木なぎなりり是こゝとと賞あはししてて名なづづくく

勝かちぬぬくくとと賞あはししてて俗よこにに千両せんりやうの名なとと賞あはししてて俗よこにに千両せんりやうの賞あはししてて

淀小橋よどこはし 水上みづかみ凡およ九く十二じふに丁ちやう橋はし下したの夜燈籠よるとうろうと照ありり通船とほふねの便べんととぬ

納所なうじよ 右みぎ小橋こはしの北きた詰つめりり唐人たうじん雁木がんぎ 同所どうじよより朝鮮人ちやうしんじん末朝まつしやうの時とき大坂おおさかより

此こゝ過書かかの番所ばんじよなり 河舟かふねの上うへアアははりり陸地りくぢととなりなり

伏見  
船宿

小状刺

茶竈煙暄吹碧漪  
家正是午殮時客來  
已滿蓬間座猶募私  
錢解纜遲

曲々挑花蕪絳雲上  
舟人各帶微醺過橋  
出巷繞三里先占江  
南春幾分

島掠隱



島掠隱

毛傷人

のつ船

大仏やとく

とらふも

猿人

けし子

啼や

膝の音

了の泣

赤川



三 巳

三十石夜船行

王震起

船宿相連京橋傍

目印行燈每軒行

有登有下三十石

或去或來旅客忙

出殼煎茶水泥臭

八杯豆腐當齒剛

按摩上爛呼步賣

鼻紙揚技於婆商

支度已調暇乞濟

持荷若者送入艙

筓低恰如掾下住

立欲着替數縮亢

借切胴間雖稍廣

不異饅頭詰重箱

虱虫數半這移燈

蒲團三帖糊殊強

船頭飯自中書島

取撓出時夜已央

高聲叱云勿出午

早早可消挑灯光

乘合口口諸國話

或歌或笑聲皆張

巫女山伏卜筮者

四國道者西國娘

何處素下交狐臭

紛紛傳來真難當

銘銘用心巾着切

合膝刺蹴互怕狼

一樣着眠身疑蟻

誰人寐言全如狂

風寒波響世間靜

犬吠遙過淀川防

誠哉色本思案外

風與見得隣寐嬌

月影賺窺胸幾蹀

年頃過盛好器量

一向難留息子勢

無分別起竊奪裳

枕上急呼如雷落

愕兮引手舉首望

起兮起兮寐惚輩

沾餅飲酒喰牛房

追々醒目何居負

橫平買取助空腹

倘若無人惡口吐

法外雜言不足惶

惜夫已到大事處

田舍百姓無下妨

其跡難往寐不就

為野暮風思故鄉

堪喜霧暗無人見

一夜懇切互不忘

上陸如散蜘蛛子

右往左往去四方

女中久因忍小便

八軒屋頭雪隱長



淀堤

俗に千両松と云ふ

是くあや

千両松よ

やうきん

翠翁

稲葉よ

凡はく

渡の境外

士朗

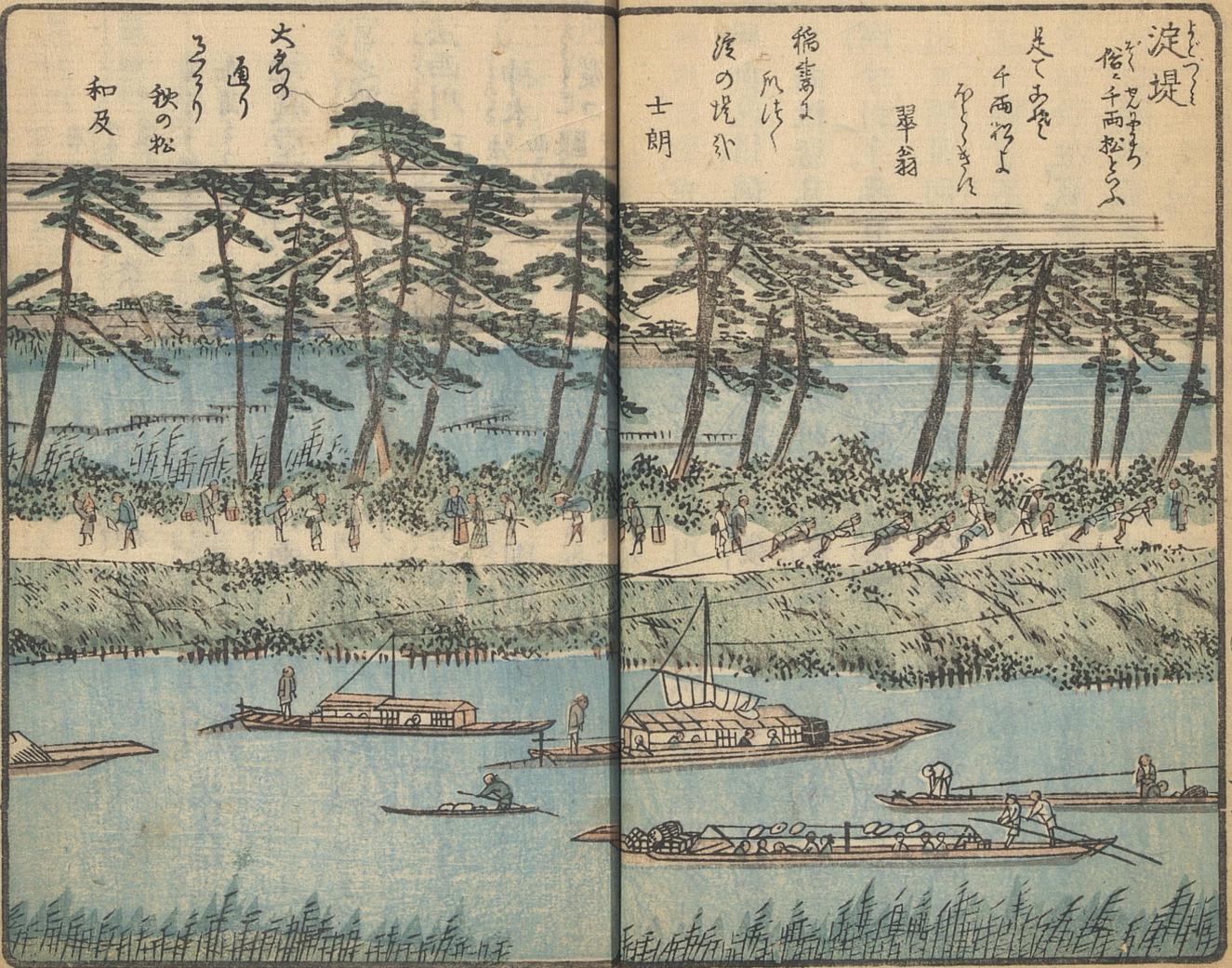
大名の

通り

さうり

秋の松

和及



一五

鳥羽川

加茂川の下流より横大路の辺り桂河のまゝ合す  
唐人雁木の下りて淀川に入る

○水垂 鳥羽川の傍あり

淀姫社

祭の生主神々 祭神三座中央淀姫神 東間千観内供 間天神

当社入千観法師の 若宮 本社の本社の 多寶塔 鳥居の東にあり 大日如來と安住 火大神祠 勧請ありと云

地藏堂 本社 例祭九月廿三日神輿一基あり

宮之渡口

右波姫の社の鳥居前より鳥羽川の落合と 小橋のつらへ舟より

○大下津 水垂村に

法西川

大下津村の 此所より大坂まで陸路行程九里の場あり

○神木

法西川の 神木村の 同村と径す

狐渡口

圓明寺の瀕より八幡の傍より渡の長サ百十間と

山崎

此西より東へあり あり荒れ地と云

大山端天王社

天王山の祭神素盞鳥等の御子八王子と鎮座し山崎郷中の生土神と云 例祭四月八日神輿三基と出

古戦場

天正十年羽柴秀吉明智光秀と戦ふ 世に山崎合戦と云

親音寺

天王山の東半殿あり 聖徳太子の 祖師堂 本堂の右有 真言宗

像と 木食以空僧正中興して當時の如く再建あり

殿下より入りて魂と 聖天堂 本堂の前の傍にあり 冥胎 殿の傍に風景

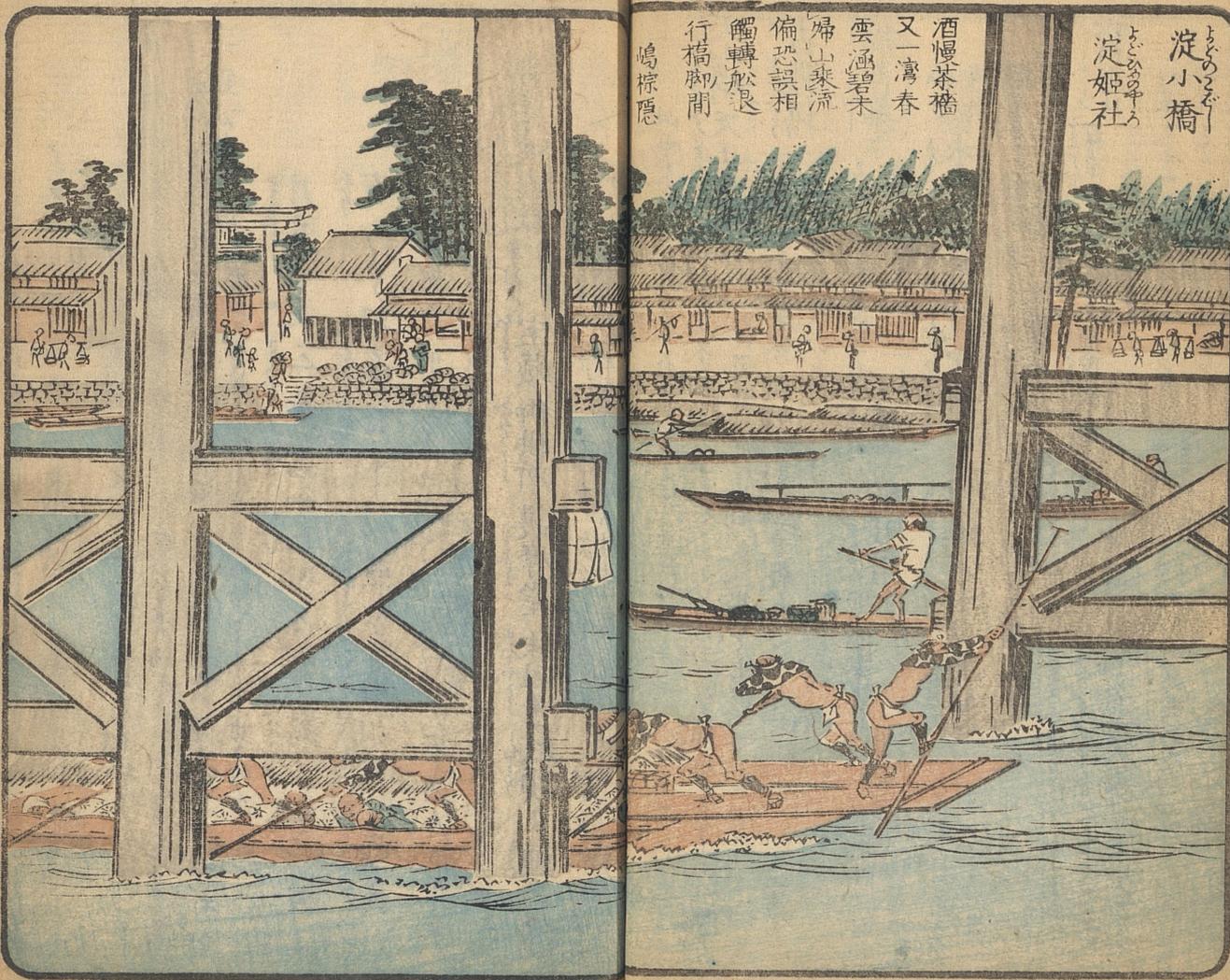
寶寺

と号し真言宗あり 補陀洛山堂積寺 本尊十二面観世音 立像あり 聖武天皇と

行基大士の 三層塔 大日如來と安置あり 聖武帝石塔台婆 庭上にあり

淀小橋  
よとのこばし  
淀姫社  
よとのひめのみや

酒慢茶稽  
又一灣春  
雲涵碧未  
歸山翠流  
偏恐誤相  
觸轉船退  
行橋脚間  
鳴掠隱



古城蹟 此城と築く 親着寺と宝寺の間より文明二年山名是豊赤松一族上洛

妙喜庵 宝寺の替り 禪宗と本寺十面釈世音より千利休の所を住り

宗鑑法師旧趾 妙喜庵の辺 宗鑑の足利義尚公の侍童として俗稱の志那弥三郎範永との小唐考能階とよ

月弓の女三郎名や二ひり 元順

有づゝ兒姿おやん 燕子花 芭蕉

離宮八幡宮 山修秘乃の中 本社應神天皇 左右ニ隨身の奇多

若宮武内社 本社 宝藏御供所護摩堂 末社社頭ニ觀多り

宮より今の八幡山に近らせ給ふのふあ此地に神降る其瑞日

輪のこゝ且橋樹の木蔭より清水涌出異香薫る此奉天

聴に達し勅と奉る清水と神射し 神殿と造宮し

離宮の名に高社法皇の公系より育り弘仁帝の御狩の時夜泊し

山寺の離宮にゆるは宮室の地を御清し

管公腰掛石 八幡の門外の傍 八幡の門外の傍より

君がさむ宿の梢と移るも湯もまよわたり 菅贈太政大臣

関戸明神社 同所の傍 関戸町より

大崎西観音寺 山崎屋戸町の 本尊十二面觀世音 高浮檀金像長一寸

鎮守社 天照太神 八幡 春日 庵魔堂 尚ちの合はらう 庵魔王及び十五の徳とら

関戸院旧蹟 山王太宮 八王子をさる 山崎 関戸町の中より古人の和あま

此大山崎の驛路ハ京師九條東寺の西四塚より西南よつと掛川久世

橋と涉り向町と登り山崎は向ひ関戸院の旧跡より是関西三十

三列の官道より文祿年中豊臣秀吉公朝鮮征伐の時備く所

故唐街道より古羅城門今四 南へ官道ありて久我繩手

渡の大渡と越り山崎の橋と渡り関戸院より是より南へ芥川宿

河原 今の頼川昆陽より西宮兵庫須磨明石に至るあり

槁本渡口

槁本より山崎へ渡り

水無瀬川

山崎の下廣瀬村より関戸院と山城松津の國境とせり

今此川と名く兩國の界とせり 水無瀬川せいの古なる朽果やらん

水無瀬渡口

山別標本の名より孫別標上那 廣瀬(渡川)とせり

君とせり交野の里よのみまき 幾夜ひまの流るゝん 憲盛

廣瀬

右一村に渡小橋より山崎まで水上凡五十町許は地より西橋井ふ

水無瀬殿

廣瀬村より羽林家を系氏に此所ハ文徳帝第一の皇子惟喬親王

故宮の遺蹟に 文徳帝第四の皇子惟仁親王忠仁公外祖とせり

清和天皇よりみづたりの 惟喬親王所より 洛外北山より山崎水無瀬宮等 並接

大山崎

天王山

觀音寺

寶寺

窈窕漢城臨水

濟豐公曾此蓋

瑤顏闈中誇指

天王色是我當

年破賊山

鎮臨中伏

山吹のそよ

暖や

宝寺

沂風

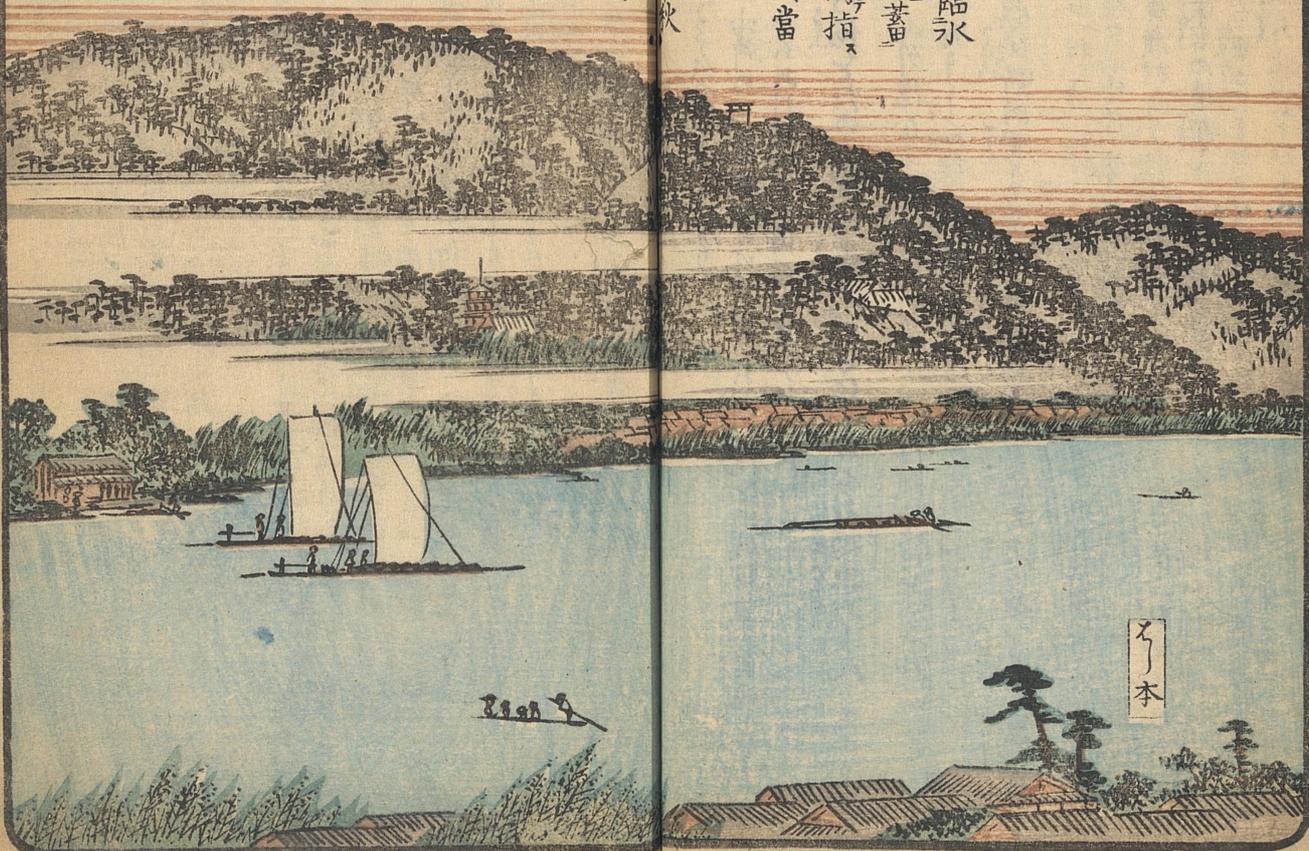
あつらひ

あつらひ

啼也

あつらひ

醒花



石ノ本

下ノ七

下ノ七

後鳥羽院御廟 水無瀬殿より 後鳥羽院生幸のありし

阿弥陀院 廣瀬村より正法山と号し浄土宗本号阿弥陀佛行基作

廣瀬神祠 同村より西八王子と移り近隣四ヶ村の生土神とい

水無瀬里 廣瀬村の旧号より古多一畧之水無瀬 ○高濱 廣瀬村の下

高濱渡口 抄州島上郡高濱村より河川交野郡楠葉村へ流川と

○上牧 高濱村の下ありし御牧のありし跡より則の上の御牧

上牧神祠 上牧村より高村の井戸

本澄寺 右同村より日蓮宗洛陽本満寺属し俗に上牧の高祖と称し

當寺本堂安置とす所の高祖四十二歳御自作の本像して世に

厄除の高祖と稱し宗門の男女帰依とて例歳三月十二日宗師より

群衆駈上鳥羽法花渡より乗船船中とて題目と唱へ太鼓

と打さるる淀の大河も狭くと漕下せり又九月十日浪花より

も同く前夜より乗合の船異體同心の男女押合各祖像の

船扉と争ひ拜し平日の容易閑く事と許さば又當村の悉く

經宗として右春秋兩度の法會より農業と休み寺へ打さるる

諸人と餐と申宛も生土神の祭礼の如し

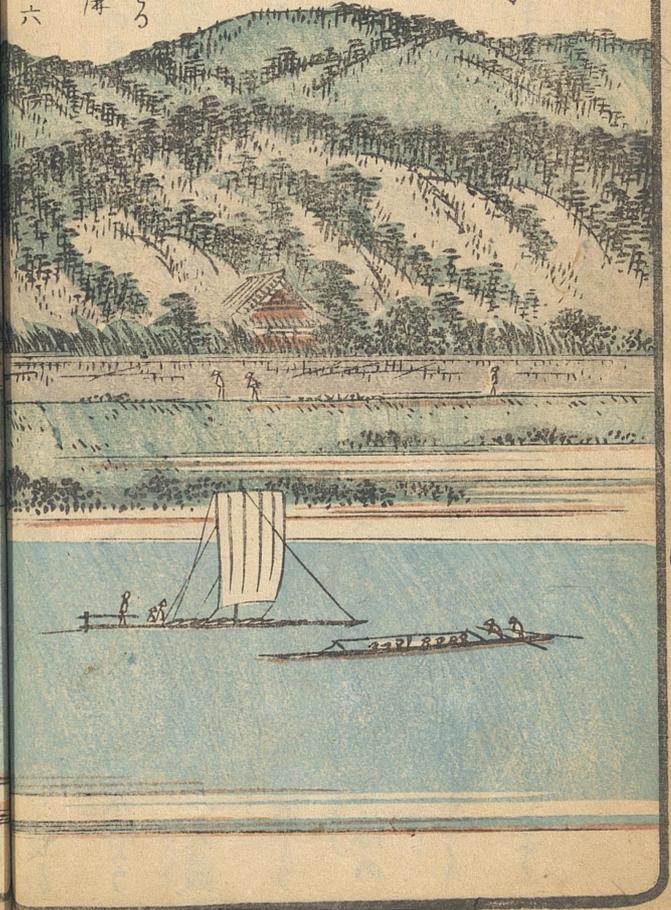
上牧  
本澄寺

葛菫

谷の  
付ろ

寺  
新  
條

許六

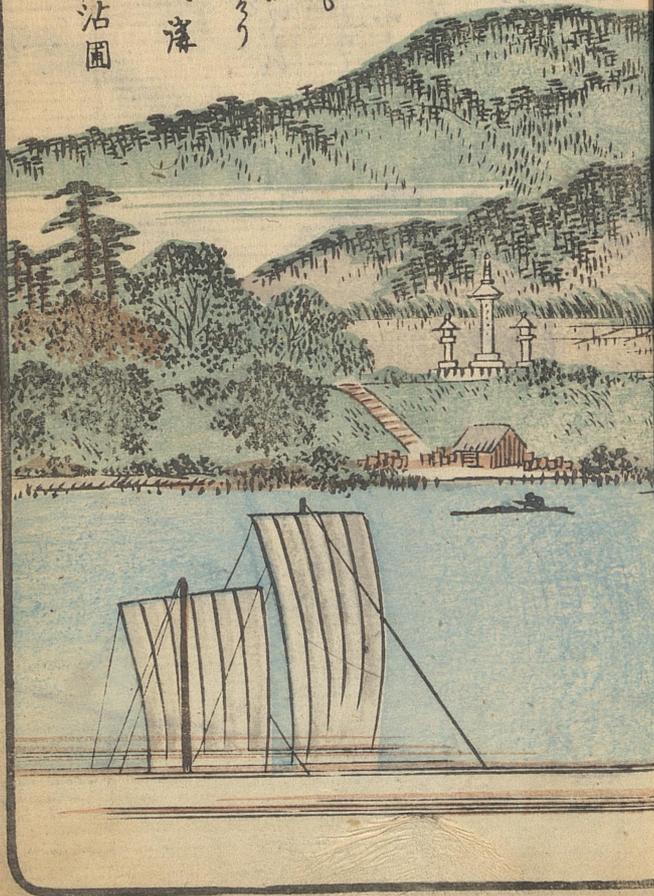


柚も柿も

拜好  
ろ

は  
新  
條

沾  
圃



〇  
下  
川  
七  
三

〇  
下  
川  
七  
三



鶯殿ういどの

すれあへん

おのり

律のきと

あぬや

指ぶり

草分り

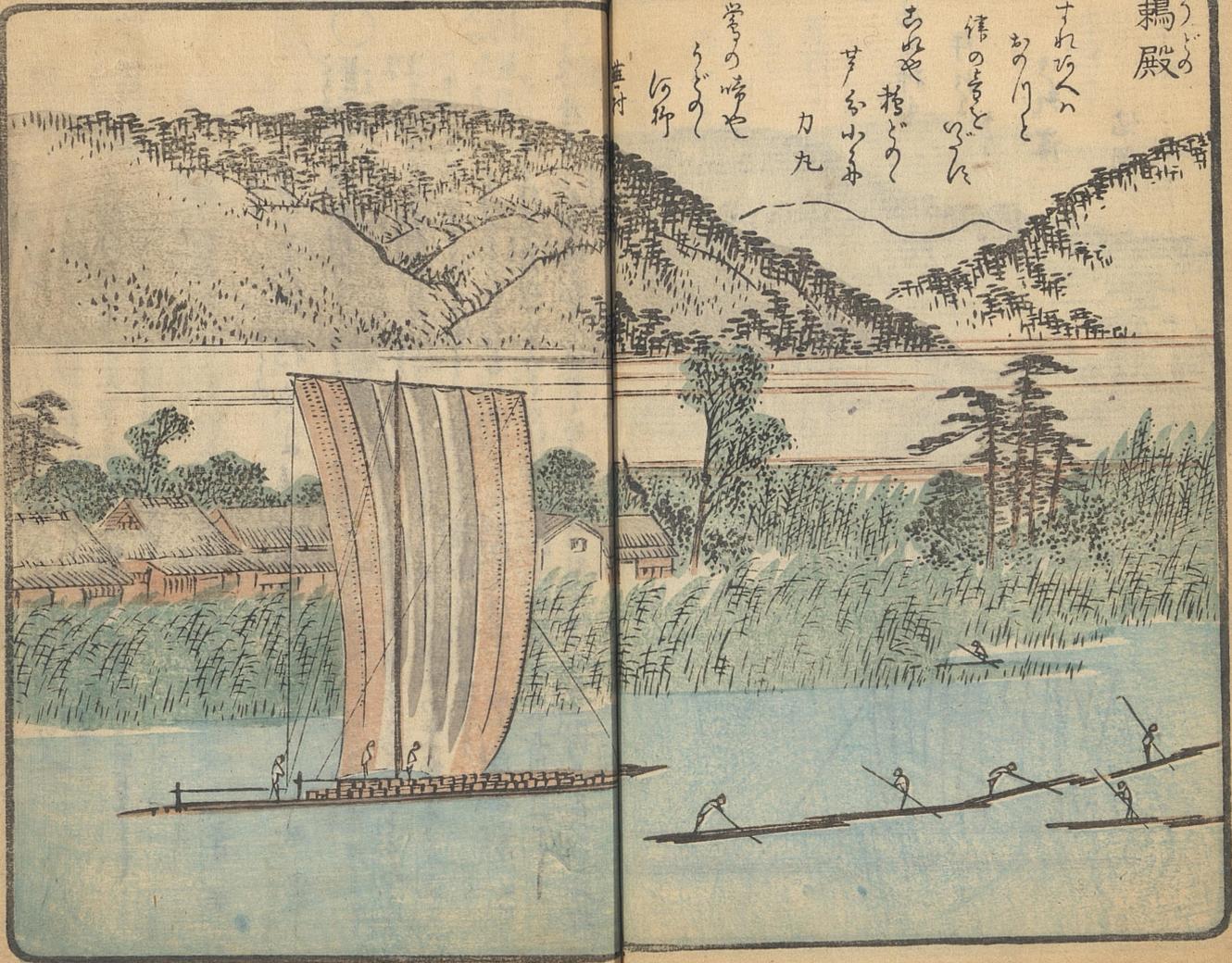
力丸

掌の啼也

うら

何物

葉付



石川

石川

○ 鶉殿

上牧村の下ニあり川邊ニ葎島あり鶉殿の鶉といふ  
土佐日記ニ云 今も鶉殿の鶉といふ鶉の島あり云云

名産蘆

右鶉殿村の境ニ生れる蘆より葎葉の義背より可なりとて  
ひらりて世々名産とて貢ぎてきたる云

葎葉の 小舌かれぬと 啼千鳥

青雨

芦より 鶉殿の 啼やわらび

五雲

○ 道西

鶉殿村の 前島 道西溪の下ニあり鶉殿川邊ニ茶店あり  
下ニあり 酒飯も自由なり勝手なり此と云ふ  
上ノ客あり又客あり上下あり同ト上牧より此の茶店まで水上九  
三廿六丁半ありと云ふ西より大坂まで陸路行程六里あり

○ 拾尾川

前島村の下ニあり一名七瀬川と云水溜大深なり物々成合 葎天川  
おとせり冠村より川に流れて冠の形なり名産あり名つと冠柳

○ 冠

拾尾川の辺にありは西ノ柳の柳冠の形なり名産あり名つと冠柳

○ 深澤

冠村の 深澤村の下ニあり村中ニ深澤あり大澤といふ  
下ニあり 大塚 実ハ王塚なり其姓名詳なり

○ 大塚渡口

信上郡大塚より河洲渡田那牧方駅三夫と渡川と云ふ  
舟より下りぬと云ふのこゝより渡の長廿百八十間あり

此地の向うの牧方の驛

されが名物の貨食船漕とせり上下の

船客の酒飯と高き俗

は喰らうと云ふ

高き

高きといふはむね高き言はずで実なる人々を喰らうと云ふ 一難

同

奉命の差のたが申模さるる喰らうと云ふはむね高き 庭茂

○ 番田

大塚村の下ニあり冠村より西村まで  
水上九十三丁余ト云

高槻城

前島より十八丁西ニあり唐崎より十八丁北ニあり  
永井氏の居城なり城下の民家建つるる願はむと云ふ

高槻城

永井氏の居城なり城下の民家建つるる願はむと云ふ

前嶋

船つけ

小使ど

女連れ

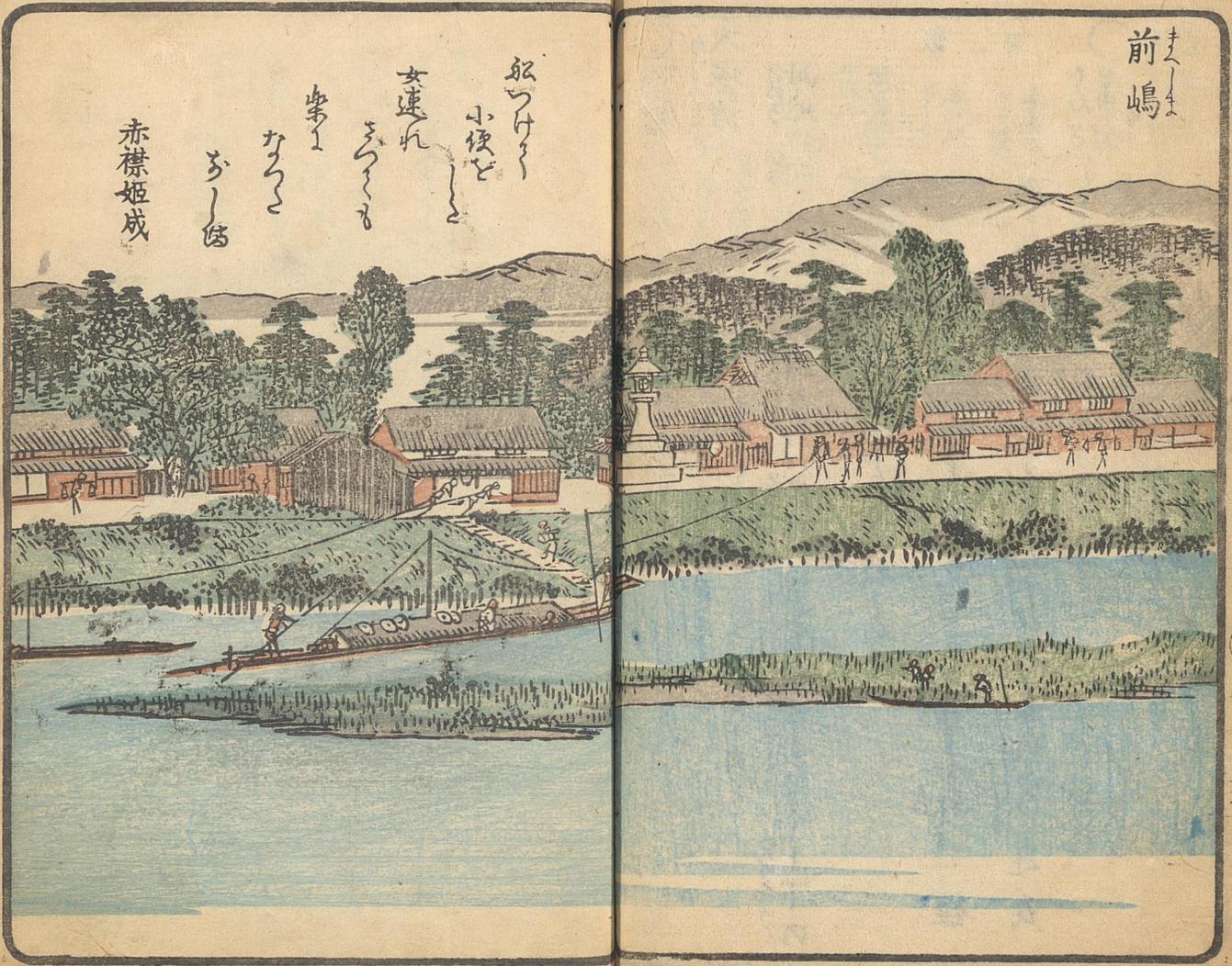
まつり

楽

かろ

ふし

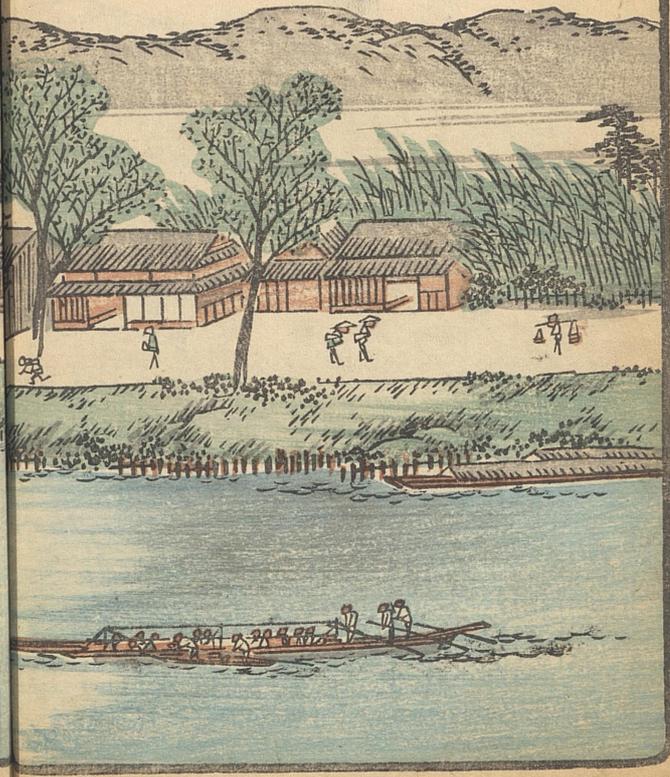
赤襟姫成



下  
一  
左

大塚

のり船の水まへ  
大塚の下うらま  
三町より曳上げ  
いんかん  
橋尾川より船  
うらま  
うらま  
うらま



伏見より  
波のしぬと

すむ月  
のり  
面白きか

糸



二ツアヒ

廿六

當城下の西街道と陸路より下る旅入山寺より此より東へ唐番の道  
三津の住吉の河迎と行なり其より高月と書け丸國の時  
大本の根樹あり是と本陣と定むれり根の字は改むと云城主の最初と  
近き連なり是と高月殿と稱れり

野見神社 當城内にあり延喜式に出今年頭天王と稱れ此西の生土神なり  
例祭九月十日撰社八幡宮八幡町にあり

芥川 番田村の下にあり水原山別乙訓郡外畑の山中にあり本郡原村にあり  
本山溪と合し服部芥川と稱れ唐崎にあり此より漢川に入

芥川村に此川條の水よありて西國往返の官道あり則一筒の

驛より旅舎茶店多く平生賑ひ

芥川に水國の形ありたがそぬありぞありり 兼香殿 中納言

芥川の園のやみ人と芥川君とをほりたぬらん思へり 懐念

